

花展メンテナンス（朝当番）をして

世田谷区 金子 嘉明

国立科学博物館の特別展「花」

への出展については協会役員を中心とした準備プロジェクトが発足し、平成十九年六月五日からの二週間、鉢植え室内展示を行なうことになりました。出展するといっても実際に展示苗を準備される方にとっては一年以上前から取り掛かり、会期中に開花するようにするには並大抵の努力ではなかつたようです。同じ協会役員といつても我が家の庭では出展できる鉢数に多くを望めないというもどかしさがありました。しかし毎日の天候や開花予想状況を聞く度に、ハラハラ・ドキドキするのは皆様と同様であつたかと思えます。小生の家は展示会場までそれ程遠くないので、展示花の手入れについては是非お役に立ちたいと思い、妻ともども会期中は毎朝欠かさず準

備会場へと足を運びました。

六月三日：前日に鳥取県の山脇理事より送られた展示苗を受け取りに博物館に出かけましたが、コンテナーに積まれた花菖蒲は予想外の暑さで一部開花してしまつた。この後、展示の現場責任者である橋本理事からの花を傷つけないようにとの指示に従つて、保管場所であるビニールハウス内に運び込みました。皆さんが重い鉢植えを運んでいる姿を見ると、逆に病み上がりで思うように動けない自分が申し訳なくて歯がゆい感じでした。その後も続々と花菖蒲が到着しましたが、どれもが立派で甲乙付けがたく流石に腕自慢の方々の作品といえるものばかりでした。

六月四日：翌日の月曜日は休館でしたが、博物館地下にある展示会場の設営という仕事が残されておりました。手伝いに行つた家内の話によると皆の協力で見事な展示が出来て、家内本人も展示の仕事が大変勉強になつたと言つておりましたが、腰痛を抱えた小林理事が大変な思いをされたようです。

六月五日：いよいよ初日の朝当番をさせて頂きました。六時三十分、病み上がりを心配している家内の同行で会場へと向かいました。途中の電車は通勤客で混雑がひどく暑い車内でしたし、上野駅から博物館まで健康な時なら苦にならなかつた距離も歩くのが苦痛で、時間も迫ってくるのでタクシーを利用しました。

さて、会場に入つて嘩然としました。午後当番が花を選んで、昨夕、地下展示会場に持ち込んだとの話でしたが、半数近くが一晩で萎れていました。ビルの空調の関係で乾燥が甚だしいためだと思われました。途方にくれてしまいましたが、高い入場料を払つてみに来てくれる人にもすばらしい花は見せられないと思ひ直し、家内に手伝つてもらつて数十m離れたビニールハウスから新しい花を選んで展示替えをしました。また、パソコン印刷の名札シールを木札に貼るのが難仕事で、八時十五分から九時までの四十五分間という限られた時間内でやるには無理があるようでした。最後に隣の設営組のバケツを拝借して水遣りをしました。が、会場係から時間切れで退場するよう指示されたのにはまつたく閉口でした。そうこうする内に出勤時間が迫り大急ぎで家内に後を託し会社へと向かいました。仕事場でもこのことが頭から離れませんでしたが、明日からは家内と二人三脚でやらねばならないとの覚悟を決めました。

六月七日：この日もタクシーを利用して会場に着いて、びっくりしました。清水理事長がビニールハウスで本日展示する花を選んでおられました。早朝五時に家を出て駆けつけてくれたそうです。三人で地下展示場に入りましたが、相変わらず半数の花が萎れているので、早速、今朝選んだ花との交換作業に入りました。三人でそれぞれに分担できると病身に鞭打ち頑張ろうという気になりました。しかし、それでも朝の四十五分間という短い時間に萎れ花を取り替えるのは大変で、前日の午後当番が花を選んで夕刻に会場へ持ち込むという作業の意味が少ないように感じられました。

六月八日：以後、最終の六月十七日まで主に私達夫婦と清水さんを加えた三人が主体となつての朝当番で四苦八苦の毎日でしたが、それでも慣れて多少のゆとりが出来る、清水さんに花の見方とか品種の見分け方など色々教えて頂き楽しい一時もありました。さらに週末には東、小山、

佐々木、村井、石井理事や会員の松本さん、武内さん等の応援を頂いて大変助かりました。なお、貴重な江戸系古品種という「宇宙」の鉢植えが出品されましたが、会期中開花しない宇宙の鉢植えを出品し続けたということ(貴重品種の保持が一種の古いステータス)に対する是非の論議が内外共にあつたようでした。

最後になりましたが、花展は連日、大勢の入場者で賑わって多くの方に花菖蒲を見て貰いましたし、私の体の方も早朝の作業がリハビリに役立ったのか、日々健康が回復して、お蔭様で元氣にならせて頂きました。また、諸先輩より花菖蒲のことを家内と一緒に勉強させて頂き、充実した二週間で送らせて頂き感謝申し上げます。また、病気ががりの私共を花展に参加させて頂いた椎野会長を始めとする諸兄、とくにこのプロジェクトの立ち上げを推進した橋本、山脇両氏に厚く御礼申し上げます。合掌



ビニールハウスでの金子夫人による水やり